令和５年度の研究（または活動）内容

今年度は主に以下の3点に注力して研究を進めた。

（1）丸森オープンアトリエ 2023（空き校舎と地域資源の活用に関する実践的研究）

2016 年に開始した「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成」プロジェクトより連携を続けてきた丸森町では、少子化により、2022 年 3 月に 8 地区の小学校が 2 校に統合された。一方、当町には宮城県を代表する超現実主義画家・宮城輝夫の作品 208 点などの文化資源がある。ちょうど 20 年前の 2003 年、宮城輝夫の没後、作品の散逸を防ぐため、町に作品や蔵書が寄贈された。現在は大張地区の隣の旧耕野小学校に保管されている。同校舎は新たな利活用方針が見出されつつあることから、絵画類の保管・利用のあり方について検討が必要となっている。

他方、丸森町役場庁舎に「シャツブラウスの娘」「冬の像」2体の作品が展示されている世界的彫刻家・佐藤忠良は、大張地区に父の生家がある。忠良が過ごした時期があり、また仙台に宮城県美術館佐藤忠良記念館が建てられてから、佐藤は地域との交流を重ねていた。

こうしたアート系コンテンツに加えて、大張地区には、大蔵山で採れる伊達冠石、今も続く養蚕、棚田百選に選ばれた沢尻棚田など多くの地域資源がある。当研究室では、養蚕業、丸森町の生業系に関する調査を行ったほか(2017-2019)、宮城県美術館の地域存続講座(2020)、空き校舎の空間資源と町が保管している宮城輝夫作品をはじめとしたコンテンツ群の整理を行い、旧大張小学校の活用方策について地域に提案を行ってきた。

そこで、2023 年 10 月 20 日から 22 日まで旧大張小学校で宮城輝夫、佐藤忠良の作品や人物を知るための勉強会、作品の活用を話し合う鑑賞・学び・談義の場を設けた。5 か月をかけて準備を進め、宮城県美ネットをはじめ文化芸術ネットワークで結びつく多くの方に関わっていただき実施に至った。来場者は延べ約 120 人で、談話コーナーの 20 席はどの企画も全てほぼ満席となり、意義ある談義の場となった（図 1-3）。なお、本件については大沼研究室・鈴木来美氏の卒業論文にまとめられた。また、関連研究の展開が大きく、丸森町でお世話になった学生研修が多いことから、2024 年 2 月 22 日に丸森まちづくりセンターにて、御礼を兼ねた報告会を実施した。

図 1-3 丸森オープンアトリエ 2023 の活動報告（大張地区の全戸に配布，継続中）

(2)学内公募研究:地場の素材と造形が活かされた風景の保全活用

宮城の石材と建築・庭・町並みに着目し、石を利用した地場の造形、建造物等についての分布調査、実測調査等を学生とともに進めた。具体的には、塩竈／丸森／雄勝・登米・気仙沼／大崎・加美および柴田の5エリアを対象とし、建物調査等を行った(学内公募研究報告書参照)。例えば、塩竈市浦戸諸島寒風沢の海苔の乾燥小屋は昭和40年前後の組積造建築で、これを手がけた職人さんが存命の可能性があり、次年度の継続調査テーマが広がるなど、一定の成果が得られた。

(3)東北各地のフィールド調査の継続研究

以下、研究所メンバーの動きを幾つか抜粋して列記する。

○大崎市川渡温泉地区景観まちづくり(大沼):宮城県の景観アドバイザーとして大崎市に派遣され、川渡温泉の地域住民とのWSを重ねている。

○大崎市岩出山・ローカルイノベーションスクール(大沼):M1生細浦氏が参加し、商品開発に関わっている。

○在来作物研究会(田中):2 年程前に取材で関わった「鬼首菜」について、その継承の取組みをフォローするため、今後、鳴子を訪問する可能性予定としている。

○八郎潟の自然文化資源を活かしたエコミュージアムの構築プロジェクト(菅原):八郎潟の自然文化資源を活かしたエコミュージアムの構築条件に関する研究で科研を取った。現在は学内の共創的研究費で山形県あさひまちエコミュージアム、千葉県の浦安市立郷土博物館(和船の展示)、鳥羽市海の博物館を視察している。これまで、「潟を語る会」やフォーラムに参加するなど、どのようなステークホルダーがいるのか、昔の暮らしぶりが分かる方への聞き取り、生態環境学が専門の千葉県立中央博物館研究員の林先生の指導で在来種の水草を復活させて育てる報告会へ参加してきた。歴史や生業をどう展開して地域資源をエコミュージアムの形でまとめていけるかを検討している。なお、和船の保存について、野ざらしから台置きとしたが、13 艘あるが腐食も進んでいて緊急性が高い。船大工がおらずどうすればよいか悩ましい課題。

○和船研究への協力(岸本):和船ネットワークがある。飛島では、島舟との関わりがあり、昨年秋ごろ、酒田市の郷土資料館が閉館し、酒田市が所有している船の行先がなくなって飛島に返したいという話になった。一方、飛島で若い子たちが船大工の工場を譲り受けて技術など復活させようとしている。